

2026年度「環境研究助成」助成先決定

2026年度も、例年通り4/15～6/30募集、その後の選考を経て、10月の理事会で助成対象が決定されました。

【応募状況】

一般研究の応募状況は、488件(前年度比+84件)と前年度比2割の増加となり、右表の通り、今年度も多岐にわたる申請がありました。募集課題を「地球のネイチャーポジティブを実現するための学際的または国際的研究」とした課題研究は、前年並み47件の応募がありました。

【選考・採択状況】

今年度の選考は、選考委員長を含む8名の選考委員によって2回の選考委員会を通じて実施されました。採択は、一般研究が22件(総額7千万円)、課題研究が3件(総額3千万円)の合計25件(総額1億円)となりました。(前年度は一般研究31件、課題研究

3件の34件)。一般研究については、応募数の増加、採択数の減少により、採択率は、前年度の7.7%から今年度4.5%へ低下しました。分野は、自然科学系19人、人文社会科学系3人となり、所属機関別では20機関と、1大学・機関に最大2人と分散化したのが今年の特徴です。採択者の平均年齢は42.5歳となり、23歳から55歳まで幅広く分布しております。また、女性の採択者は4人と昨年度比3人減少しましたが、最年少採択者は大学院修士1年生(23歳)女性をはじめとして優れた研究提案が多数ありました。助成金額は、平均318万円と前年比92万円増加し、申請金額に対する平均充足率は71%となり、前年の69%から改善致しました。査定金額の最大は500万円、最小は140万円でした。課題研究については、地球のネイチャーポジティブを実現する為の様々な課題に関して正面から向き合った研究提案が多数寄せられ、その中から3件が採択されました。2027年度のテーマは、新たに「プラネタリーヘルスを追求する学際的または国際的研究」に決まりました。

【採択された研究(課題研究)事例紹介】

「ネイチャーポジティブの地域実装を支える学際的自然資本評価指数の開発と社会実証」

(研究概要)

(龍谷大学 先端理工学部・教授 山中 裕樹 他6名による研究)

水や空気に漂う生きものの「DNAのかげら」を調べる環境DNA分析を使えば、生きものを捕まなくても、そこに何がすんでいるかが分かります。私達はこの技術で琵琶湖の自然の“健康状態”を数字で表す指標をつくってきました。本研究では、これを企業や地域がお金の判断に使える「自然の会計簿」へと発展させ、地元企業・銀行・地域ファンドと一緒に、自然を守る取組みが経済的に報われる仕組みを滋賀から実証します。

○住友財団の研究助成に応募したきっかけ

滋賀県の委託事業で開発した生物多様性の指標(BCCI: Biodiversity Conservation Composite Index)を企業の会計や金融の仕組みにまで組み込む次の段階に進めたいと考えました。こうした学際的研究を地域の中小企業や金融機関と組んで実証する私達の挑戦的な研究は、貴財団の課題研究テーマにまさに合致すると考えました。

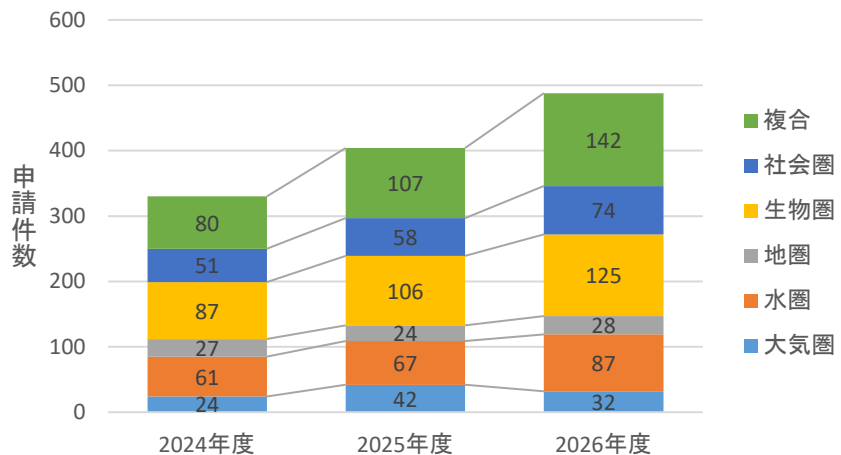
○助成が決まった感想

異なる分野のメンバーが頭を突き合わせて練り上げた提案を評価していただき、共同研究者一同、大変喜んでおります。

○この研究の可能性と今後やりたいこと

2年間で自然の状態を「資産・負債」として評価する新しい指数(NPCI: Nature Positive Composite Index)の試作版をつくります。そのうえで金融機関における投資・融資・預金といったサービスにどう運用できるか、企業におけるポジティブ・インパクト創出で経営判断にどのように活用できるか、自然を守るファンドにおける評価でどう実行性を持たせるかなどに試験的に活用し、自然を守ることが地域の経済にもつながる「現代の三方よし」のモデルを滋賀から発信したいと考えています。

環境研究(一般研究)分野別応募件数推移



【龍谷大学、深草キャンパスにて山中教授近影】